

# 洞窟陣地の暑い夏

安藤豊弘

太平洋戦争末期

日本本土の最南端、沖縄を守る日本軍が、圧倒的多数のアメリカ軍部隊の猛攻撃を受けて玉碎する寸前、昭和二十年六月十八日、私の所属する部隊は、本土決戦の最前線になると予想される鹿児島市西方三十キロ附近に広がる吹上浜を目指し、薩摩半島の北部の山道を踏み越えて行軍を続けていた。梅雨の未だ明けやらぬ雲間をぬつて、銀色の機影をきらめかせてアメリカ軍の大型爆撃機が悠々と飛行している。いつ敵機の襲撃を受けるかわからない。部隊は敵機を発見すると全員山中に退避し、

敵機が去ると再び行軍を続行する。

私は当時熊本予備士官学校を卒業し、初めて現地部隊に配属されたばかりの新任の見習士官で兵二十名を指揮し、重機関銃二挺をもって歩兵戦闘を支援する任務を帯びていた。一個大隊約五百名の部隊が一团となつて朝霧に煙むる峠をいくつもこえて行軍を続けるうち、間もなく鹿児島市が近いという急坂を下つて行く時、夏草の生い茂つた山道や木立の間に焼夷弾が大きな束のままあちこちに落ちていくのに出会った。不審に思いながら更に行軍を続け木立の間から鹿児島市街を見下ろして驚い

た。市街が海岸迄一面にまっ黒に焼けつくされているではないか。さては今しがた山中で見た焼夷弾はアメリカ軍が投下した不発弾だ。いよいよ戦場に近付いてきたという緊張感を抱いて山を下り市内に入つてゆくと、見渡すかぎり焼け落ちた家屋や電柱電線が道路にまで散乱しており、倒れた電柱から火の粉が上り僅かに焼け残つて点々と建っている土蔵の窓から白煙が昇っている。照りつける太陽の直射と焦土と化した残骸の熱気の中を、部隊は汗まみれになつて黙々と行軍を続けた。

ふと見ると道路わきの崩れかけた防空壕の入口に坊主頭の男の児が二人、老母を真ん中に挟んですすけた顔をして放心状態で座り込んでいた。よく見ると老母は小さな手を合わせて兵隊を拜んでいる。この仇は